
こんな転生有りですか？

藤之宮 アレス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな転生有りですか？

【Nコード】

N2619Q

【作者名】

藤之宮 アレス

【あらすじ】

二次小説にかかせないジャンルの一つ

転生モノ

転生モノが始まるパターンの一つにあるのが

『神』と呼ばれる存在によって殺され、その『神』と呼ばれる存在に能力を貰って異世界に転生する。

その『神』と呼ばれる存在の姿は老人、中年男性、美女、少女と様々である。

もし、こんな『神』がいたら？

貴方はどう思いますか？

（前書き）

二次小説の転生モノを見ていたらピンツ！と頭に浮かびました。

既に誰かが考えているかもしれませんが…。

笑って頂けたら幸いです。

「ん…」

目が覚めて周りを見たら真っ白な空間だった。

足下も空も白い。地平線と言う物が存在しないのかと言う位、周り
は白かった。

俺の名は『ふじのみや藤之宮 かずま和真』

今年、高校三年生に進級したごく普通の一般人だ。

勉強、運動、容姿、どれをとっても平均の取り立てて特徴も無い高
校生だ。

強いて言えば、漫画とかアニメが好きだと言う事くらいだな。

「何処だ、此処は。」

目が覚めたら真っ白な空間。此処まで白いと逆に目が痛くなりそう
だ。

「待てよ、この展開は…」

頭に浮かぶのはネットでよく見る二次小説のジャンルの一つ、転生
モノ。

確か、居眠りトラックとかに轢かれてよく真っ白い空間に来ていた
…と言うモノだ。

「となると、この後に『神』と呼ばれる存在が現れて『すみません
でした!』と言って土下座するのかな?」

大抵は老人とか、美女というパターンが多い。たまに少女、幼女みたいなパターンもあるが。

「ふふう〜ん。となったら、どんな能力貰ってどの世界に転生させて貰おうかな〜」

頭に浮かぶのは人外の能力貰ってアニメ、漫画の世界に転生して大暴れしたりハーレム作ったりする展開。人生バラ色とはこのことだろうか。

「しかし、誰も来ないな……」

此处に来てから10分は経つと言うのに誰も来なかった。

『ぶるうあ……』

「ん？」

何かが聞こえて来た。

遠くで何かが叫んでいる様に聞こえる。

「何だ？」

『ぶるあ ああ……』

上を見ると何やら黒い物体が落ちて来てる様に見える。

「え？」

よく目を凝らすと人の様に見えた。

「ぶるあああああああああああつ……！」

「どわぁ！」

ドゴンツと言う爆音が俺の視線3m先で起きた。爆風が起きて俺は腕で顔を覆って目をつむった。顔には豪快に衝撃が走る。

「いてて…何が落ちて来た…？」

俺は少しずつ目を開けて目の前の状況を確認する。視界は灰色の煙に覆われてまだ良く見えない。

「…ター。ネーター？」

煙が少しずつ晴れて、見ると男がうずくまっているように座っていた。

そして、全裸の様に見える…が？

「な、何で上から降ってきたんだ…？」

俺は落ちてきた男に近寄った。

「バ————ッ……！」

男はいきなり立ち上がってボディビルダーのようなポーズをキメていた。

両腕を上にあげ、肘の角度を90度に曲げて力こぶを作るポーズ。しかも、見れば男の身体は下手なボディビルダーが裸足で逃げそう

な位、筋肉質であつた。

そして、身長170?の俺が見上げる…そう、目の前の男は身長2m位はあつたのだ。

「『バーツ』じゃねえ!」

俺はそう言つて大男のふくらはぎにローキックを繰り出した。

ゴスツと言つ鈍い音が響いて…

俺の脚に激しい痛みが走つた。

「うぐあ…電柱を蹴つたみたいに硬い…」

うずくまつてしまった…。

見ると大男の脚も凄まじい位の筋肉で覆われていた。

太股に至つては女性のウエスト並みにあるのじゃないかと思うくらい太かつた。

そして、何故か黒いブーメランパンツで股間も盛り上がりはハンパでは無かつた。

「又ハア…」

大男の口から煙とも思える位の湯気が出ていた。

更に、髪が生えて無く、あろうことか眉毛までも生えていない。

子供が見たら泣き叫ぶ事間違いない位、怖い外見だつた。

つか、この声はどう聞いても若。ボイスです、ありがとっございしました。

「あ、あの?貴方は何者ですか?」

「私か？」

「はい。」

「ふむ、私は…君達で言う『神』と呼ばれる存在だが？」

見た目に反して意外と紳士的な口調だな、おい。

「そ、そうですか…」

ここで『自称神』とか『神（笑）』とかにしたら一撃で撲殺される。間違いなくされる。

死んでるけど…殺される勢いだ。

「簡単に説明するとだね。私の部下が間違えて君を死なせてしまったのだよ」

やはり、ミスが原因だったのか。

そう言えば、帰る途中にビルの建設現場の前を通っていたらいきなり衝撃が走ってその後の記憶が無い。

どうやら上から鉄骨辺りが降ってきてつぶされてしまったのだろう。

「あゝ。それで、どうなるのですか？」

「当然ながらこちらではまだ受け入れる体制は出来ていない。あと70年は生きて貰わないと困るのだ」

「と言っても、生き返るとか出来るんですか？」

「無論、君の身体は使い物にならない。と言う事で違う世界に転生して貰いたいのだが…」

よっしゃ。望み通りの展開が来ました。

「分かりました」

当然、断る気も無く了承する俺。

「そうか。なら、サービスとして人外の能力を付与してあげよう」

「ありがとうございます」

頭に浮かぶのは『魔力、気はMAX、全ての漫画、小説、アニメに存在する能力全て使用可能』と言った事が頭に浮かぶが…。

「まあ、だからと言って『魔力、気はMAXで全ての漫画、小説、アニメに存在する能力を全て使用出来る』と言った願いなら…」

「願いなら？」

「この私と一緒に関節技の鍛錬をして貰ってからでしょうか。無論、私と同じ服装で…だが。」

無駄とも言える爽やか過ぎる笑顔でポーズを決めて言うマッチョ神肌の色は日に焼けて黒いのは何で齒はそこまで真っ白なんだよ。逆に怖いわ。

「ハハハハ、そんな事、言う訳無いじゃないですか」

想像しただけで背中に冷や汗が流れる。

何を悲しくてこんな暑苦しいマツチヨ神とサブミッションの鍛錬をせにゃなんのだ。

「それで、希望の能力は決まったかね？」

「ちょっと待って下さい……」

「まあ、そんなに焦らなくても大丈夫だ。時間はたっぷりある」

やはり、紳士的な対応である。最も、外見に全く似合っていないのだが…。

「それじゃあ、『魔力、気はその世界に存在する最強人物の1・5倍』と言うのは？」

「ふむ、問題無い」

「あと、『GS美神』に出てきた『横島忠夫』が使用してた『文殊』が作れると言うのは？」

「ほう、なかなか面白い能力をチョイスしたな。それも問題無い。『霊力』の代わりに『気』で作れる様にしておこう。あと、鍛錬したら『双文殊』も作成して使用出来る様にしておこう」

「ありがとうございます。とりあえず、それ位……ですかね」

「なるほど、分かった。そうだ、これはサービスで『瞬間記憶術』とドラ。もんが使用している四次元ポケットみたいなモノも追加しておこう。ただ、中身は何も無いが。」

「ありがとうございます！」

これって結構チートじゃね？

「さて、転生する世界だが…」

「世界ですが？」

「『魔法少女リリカルなのは』、『ゼロの使い魔』、『魔法先生ネギマ！』、『Fate/stay night』、『真・恋姫無双』の五つの世界からランダムで選ばれる」

「へ？」

「すまないが、こればかりはこちらの都合でどうにもならないのだよ」

「そうですか…」

まあ、どれも知ってるから問題は無いな。

「そう言えば、部下の方って？」

ふとした疑問が頭に浮かんだから聞いてみる事にした。

「ああ、彼は1年の間は私と間接技の稽古をすることになった。無論、私と同じ服装でだ」

またも爽やかな笑顔で答えるマツチヨ神。だから怖いんですが。

それとポーズをキめるのは癖なんですか？

「そうですか」

それ以上聞くのは止める事にした。

つか、想像したく無いし。

「さて、能力も決まった事だし。そろそろ転生して貰おうか」

「そうですね、分かりました」

「ぶるうあああああああああああ！！！！」

マッチョ神はポーズをキメて叫び出した。

だから、怖いんですよ。頭に青い血管が浮かんで。子供見たら絶対泣くって。

そうすると、俺の目の前に黒い穴が開いた。

「さあ、その穴に入りたまえ。君の人生に幸あらんことを。」

「あ、はい…ありがとうございました」

そう言っただけ俺は穴に飛び込んだ。

そして、段々と意識が遠のいていった。

「ん…」

目が覚めたら薄暗い森の中にいた。
一応、昼間の様に思えるが深い森の中らしく日の光はそんなに入って来ない。

「夢…じゃないな」

俺はそう呟いて立ち上がった。

「…？」

やけに視点が高い。そして、身体に妙な違和感を感じていた。

「何だ？腕が何か…突っ張ると言うか…？」

手を見ると明らかにゴツい。腕も以前と比べモノにならない位に筋肉質になっていた。

「おわっ、エライマッチョな身体に…」

そして腹をめくると六つに分かれた腹筋が見えた。

何だ、コレは。どこそこの世紀末救世主みたいになってるじゃないか。

「…何か、頭が涼しい…。」

俺は頭に手を乗せた。

「…！！！！毛が無い！？」

顔を触ると眉毛も生えて無い様に思える。

「眉毛も…無いだと!?!」

もの凄く、イヤな予感を感じる。

まさかとは思うが…。

そう言えば、さっきから喋ってる声も明らかに若。ボイスに聞こえる。

「ぶるあああああああああああああ!!!!!!」

俺は大声で叫んで森の中を疾走した。

運良く泉を見つけて俺はそこに駆け寄った。

澄んだ水を覗き込んで…俺は驚愕した。

スキンヘッドで眉毛が生えてなく、そして目つきがもの凄く悪い男が写っていたから。

「何じゃこりやあああああああ!?!」

大声で叫んだら周りから鳥たちが一斉に飛び去っていった。

何だよ、この悪役にしか見えない顔は!?!

そして思い出した。

恋姫無双に出てきた『貂蝉』の髪と眉とヒゲを無くした顔と言う事に。

最も、口はそれより小さくてバランスと取れているのだが。

だが、どう見ても子供が見たら泣き叫ぶレベルだ。

「うおおおお…こ。亀の両。が確か眉毛を剃られて大変な事になった話があったが…。それと同等の恐ろしさだ…。」

思い出されるのはこ。亀24巻に収録されていた話だった。

確か、両。が床屋に行つて眉毛を剃られてしまつて…。その後は本職のヤ。ザもビビってたな。

この外見ではどの原作に行つてもかなりキツイのは間違いない。

白い魔王様からはスターライトブレイカーを撃ち込まれて。

ツンデレ娘からはエクスプロージョンを撃ち込まれて。

赤毛の子供先生からは千の雷を撃ち込まれて。

腹ぺこ騎士王からは約束された勝利の剣を撃ち込まれて。

蜀、魏、呉のどの国に行つてもその場で斬首されてもおかしくない。

ひょっとして、俺…始まつてるけど終わつた？

「ぶるあああああああああああああ！！！！！」

もはや叫ぶしかなかった。

よくよく思い出してみたら容姿の話を全くして無かつた俺も悪いのだが。

せっかく彼女いない歴〃年齢を解消しようとしたのがパーになつてしまつた！

「あのクソ神、今度出会つた時は絶対ぶち殺してやるわ！ぶるああ

ああああああ！」

俺の咆吼を聞きつけて森に住んできると思われる熊みたいなヤツが現れたが、一睨みしたら速攻で退散したことを伝えておく。

かくして、藤之宮 和真はどのような人生を送ったのか。
それは読者の皆様の想像にお任せしよう。

（後書き）

何と言いましょか。

話し合いつて大事ですよね。

皆様、笑ってくれたら幸いです。

ちなみに、続きを書くつもりは一切ありませんw

あくまでコレはネタなので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2619q/>

こんな転生有りですか？

2011年1月26日08時45分発行